

18 . 力ある女王たち (タガログ)

昔々、パイ湖の南部に、ひっそりと小さな村がありました。この村は、肥沃で豊かな土地でした。この地域の初期の開拓移民は、よく働き、肥沃な土地を作り、とうもろこし、米、芋、そしてほとんどすべての種類の果物や野菜を作っていました。彼らのこの地での熱心な働きによって、一年中、すべての人に十分な、たくさんの食物を供給できたのです。この村の人は、平和で、満ち足りた生活をしていました。

この村の人々は、強くまた親切なガート・パンギルという名の指導者に統治されていました。彼は誇り高く、威厳のある男でした。彼は、自分の褐色のマレー人の肌に、誇りを持っていました。そして、彼の文化、彼の人々、そして彼の遺産を大変誇っていました。多くの時間、この勇敢な武人は、彼の村と、彼の部族を、盗賊団から守りました。盗賊団は、しばしば、この地を襲い、人々の食べ物や備蓄品を、盗んでいたのです。

ガート・パンギルには、息子がなく、しかし、三人の美しい娘たちで、祝福されていました。長女はバシリア、次女はアドリアナ、末娘はエスターという名でした。父と同じように、これらの娘たちも親切な心を持っていました。しかし、また彼女たちは誇りある兵士であって、大ナタや他の武器を練習し、彼女らの土地と人々を守ろうとしていました。彼女たちは、父が亡くなった時にも、立派な後継者になろうと、準備していました。

この時代、スペイン人がフィリピンを植民地に始めました。彼らは船や兵士や剣や、教会法を持ち込みました。彼らはまた、彼らの宗教を持ち込みました。兵士たちが剣でフィリピンの人々の体を征服する間に、彼らの修道士たちや司祭たちは、フィリピン人の心と魂をキリスト教信仰で征服しました。まもなく、フィリピンの遺産と文化は、外国であるスペインの征服者の新しい文化に、とってかわられました。

変化の流れに反抗できず、ガート・パンギルと三人の娘は、キリスト教信仰の洗礼を受けました。フィリピンの神話と伝説 18 . 力ある女王たち

人々は、「山の女神マリアン・マキリンが、洗礼のためにやってきて、三人の王女の教母の働きをしているんだ。」としました。

洗礼の儀式の間、キリスト教の司祭は、ガート・パンギルの王国を祝福しました。ガート・パンギルの土地の新しいキリスト教の名は、三人の娘のイニシャルを使って、パイ (Bae) となりました。

新しい信仰への入門を祝うために、ガート・パンギルと彼の民は、新しく起こった宗教の、その地の第一の建物を建てました。そして壮大なミサと祝福が行なわれました。王国の幸せな人々が、ずっと昼も夜も続けて、歌い、踊り、祝いました。彼らは新しい宗教を、疑問も思索もなく、受け入れました。スペイン人司祭は、彼らにアジアの文化と遺産を忘れるようにさせ、盲目的に外国の、ヨーロッパの文化、スペイン人の生き方をするように指導しました。

時は過ぎて、ついにガート・パンギルは大変歳をとり、病気になりました。彼は死の床についたので、スペイン人司祭は、老人に最後の祝福を与えました。ガート・パンギルが死んだ時、教会の塔の鐘が鳴り響きました。その、カランと鳴る音は、王国中にこだましました。人々は、彼らの偉大な守護者であり、友人が、ついに亡くなったことを知りました。

その地のすべての人は、彼らの偉大な、そして親切な指導者の死を泣き、喪に服しました。司祭は偉大なガート・パンギルのために、教会で葬式のミサをたて、ミサには国中から、愛と尊敬を育んだ統治者に、最後の敬意を表すために大勢の人が来しました。

バシリア、アドリアナ、とエスターはすぐに、悲しみをよそに、決然として、失った、大変尊敬した父の良い仕事を継続しました。彼女たちの賢く、親切な指導、彼女らの勤勉さと、彼女たちの愛した父のすばらしい伝統を保つ決心は、王国に、かつてなかったほどの繁栄をもたらしました。彼女らの教母、マリアン・マキリンは、彼女の三人の信仰の娘を誇りに思い、そして、女神は彼女たち

を守り、また、部族を守って、災いは降りかからず、彼女らの土地と人々は、破壊的な自然の災害から免れました。

彼女らの仕事や女神の恩恵の結果、三人の女王（今やそうなった）は、人々の尊敬と愛と賞賛を受けました。彼女らは、自身の王国だけでなく、他の地方でも有名になりました。

女王たちの名声と人気は、スペイン人の司祭には腹立たしいものでした。彼は三人の女王が人々に対しての力と影響力があることを妬ましく思い、彼自身の権力を傷つけられているように感じました。「女王たちをどうしてやろうか。彼女らは、私や教会よりも重要になっている。」と彼は言いました。妬みが高じて、司祭はガート・パンギルの三人の娘を殺す計画を立てました。彼は、彼女らに「謙遜」の信仰を教えようとしてしました。

司祭の身勝手さと権力への野望のため、王国のすべての独身者に、毎日曜日に、ミサに参加することを義務づける、新しい法を發布しました。従わない者への罰は、教会と信仰から、破門する、というものでした。これは、三人の女王を彼の命令に従わせる企てでした。

最初の日曜日、新しい法令は効果があり、小さな教会は王国の人々によって埋め尽くされました。司祭の新しい法に怯えて、力あるスペインの教会に立ち向かうことを避けたいと思ったからです。

司祭は祭壇に歩み、もっとも良い絹の式服と金の組み紐を身につけましたが、使者が教会に入ってきて、驚いた司祭に、三人の女王の謝罪文を渡しました。その記録には、司祭に、三人の女王は、ミサの始まりに数分遅れるので、謙遜に、礼拝の開始を、彼女らが着くまで、待ってほしい、というものでした。

司祭は、待つことは、それまでにありませんでした。そして、これを見て、これは、三人の女王が、課せられた課題に負けて、彼女らをいじめるいい機会だと思いました。使者と会衆の前で怒った司祭は、三人の女王を見下し、言いました。だれもミサに遅れる権利はないし、どう考えても彼フィリピンの神話と伝説 18 . 力ある女王たち

女らの考えたことは、重要なことではないから、彼女らの行動は、我慢できることではなく、受け入れられるものではない、というものです。使者は司祭の公けの行動によるアピールを受けて、直ちに教会を出ました。

三人の女王は宮殿で、落胆した使者を迎えました。彼女らは大変悲しみ、その司祭が聖職にふさわしくない行動をとったことに驚きました。宮殿守護の長、勇敢なエステバンという名の人物は、教会の人々の前で女王たちが辱められたことを聞いて、彼に司祭に対しての復讐をする許可を頼み、言いました。「私は女王に対して、そのような方法で辱める外国人を赦すことができません。特に、彼は、あなたの寛大さと新設によって、ここに滞在し、彼の信仰を説教することを許されたのですから。公けに、あなたの女王としての立場を辱めたこの人をどうしましょう。私たちは、彼が私たちみんなを、盲目的に追随する者に作り上げることを許してはなりません。尊敬の意味を教えなければならないのです。」

三人の女王の命令によって、エステバンと彼の宮殿警護人たちは教会へ行き、ミサの中心にいる司祭を逮捕しました。彼らは司祭を大きな檻に入れて、肩にかついで、村の広場へ運んで行きました。呆然とした会衆は、宮殿警護人の行列に続いて行きました。

檻は村の広場に置かれ、すぐに、あざける村人たちによって、囲まれました。彼を平手打ちする者もいるし、怒りのため、指を彼に振りかざす者もいました。彼らは愛する女王に対しての彼の不適切な行動を、受け入れるのを拒否しました。屈辱を与えられた司祭は、あざける野次馬の怒りから、顔を隠しました。彼は、少しの恐れと深い屈辱から、公然と泣きました。彼はしっかり縛られた手に、十字架を握って、心から祈りました。うなり声の野次馬の暴徒から逃れようと、目と耳を覆いました。彼は、少し前まで彼の盲目的な追随者だった者が、今や彼を怒って、悩まず者になったことが、信じられませんでした。

三人の女王は、エステバンにその日おそく、司

祭を檻から出すように命じました。恥ずかしくて、村人から顔を隠し、司祭は、彼の住んでいる修道院へ走って帰って行きました。しかし、修道院は、全く好ましくないところでした。彼の僕たちはみんな、彼らの主人の、教会での許されない行動を聞いて、彼を見捨てたのです。

孤独な司祭は、教会へ歩き、祭壇の前にひざまずきました。彼は深い眠りにつくまで、何時間も泣いて祈っていました。

夜中、司祭は起きて、孤独に浜へ歩いて行きました。彼は心に、三人の女王とすべて彼をあざけた者たちへの復讐の綿密な計画を立てていました。夜空は、冷たい月の光で照らされていました。しかし、夜の星は輝きませんでした。なぜなら、暗い雲によって、さえぎられていたからです。ついに、孤独な司祭は、湖の岸に着きました。ここでは、漁師たちが、捕らえた魚を携えて、家に帰る途中でした。これらの漁師たちは、村での昼間の異常な出来事を知らなくて、司祭に敬意をこめて挨拶し、彼の手に口づけをしました。

そこで、司祭は漁師に用事を頼みました。「私が祈れるように、湖の中央に出してくれ。」司祭はカヌーに乗り込み、漁師たちは、自分たちが司祭の悪い計画の実行に使われるとも知らず、彼のために、湖の中央に漕ぎ出し、歌いながら漕いで行きました。

冷たい月の光で、漁師たちは、船の先頭の方で静かに祈っている司祭の頬に涙が流れているのに、気付きました。しかし、その時、司祭は小さな黒い本を開き、大声で読み始めました。漁師たちのわからない言語の、不思議な呪文が、読まれました。すると、突然、司祭がそこで立ち上がり、漁師にできるだけ速く漕ぐように叫びました。「もっと速く！もっと速く！」と、彼は叫びました。彼は漁師に、彼を見ないように、漕ぐことに専念するように告げました。その時、司祭はサンダル的一方を脱いで、湖の暗い水に投げ入れました。

司祭のサンダルが、湖の穏やかな水面から消えて、恐ろしい、わめくような音が、カヌーの後ろフィリピンの神話と伝説 18 . 力ある女王たち

から聞こえてきました。恐れた漁師たちが、その音のする方に振り向いたら、彼らは恐ろしいものを見ました。巨大な津波が湖にとどろいたのです。空高くそびえ立ち、彼らの方に迫ってきます。ぞっとした漁師は、全身の力をオールに込めて、弱い小さなボートを漕いで、襲ってくる水の恐怖から逃れようとしていました。すぐに、目がくらむほどの光が空からきらめいて、夜は、ものすごい雷のとどろきがこだましました。まだ、湖の水は荒れ狂い、泡が広がっていました。そして、恐ろしい湖の波は、もろく、無力なカヌーを打ち、空中に持ち上げ、波の上に落ちて、粉々にこわれてしまいました。金切り声を出す弱い漁師と司祭は、空中に放り出され、荒れ狂う水に落ちて行きました。そして、すべてのものは、視界から消えて行ったのです。

次の日、地平線の上に朝が来て、すべてのものは、湖の上に静かになっていました。漁師たちは、自分たちが岸にうちあげられていることがわかって、感謝していました。彼らは、自分たちが安全であることを神に感謝したのです。しかし、彼らは、スペイン人司祭の姿を見つけることはできませんでした。司祭が唱えた、パイ王国破壊の呪いが、実際には彼を殺し、王国の人々を助けたようです。

恐ろしい湖の波は、事実、湖を荒れ狂い、村にも襲い掛かりました。しかし、誰も傷つかず、ただ、傷ついた建物は、教会と修道院だけで、それらは廃墟となり、ガレキとなりました。そして、今は、恐ろしい嵐と津波のために沈んで、水の中、ほんの数メートルのところに残っています。

今日、パイ市（その地域は、現在こう呼ばれています）の浜の西にいる大勢の老人たちは、天気の良い夏の日に、こんな風に言います。「もし、生活が大変厳しいと思うことがあったら、あなたは、きれいな水の湖面の下にある、教会と修道院の跡を見ることだ。教会の祭壇や、宗教的な置き物が散在しているのが見えるだろう。ブロックやガラクタや。それらすべては、かつて個々に大きな教会があったものの残骸なのだ。」